

# 親潮

第 321 号  
令和 5 年度 第 1 号

OYASHIO

北水同窓会誌

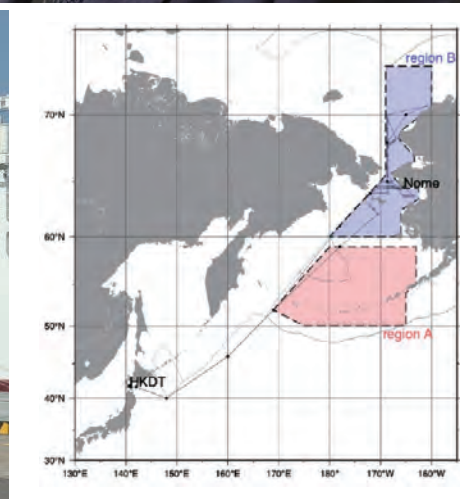
2023  
321  
No.1

北水同窓会のEメールアドレスです

[hokusuialumni@gmail.com](mailto:hokusuialumni@gmail.com)

ホームページアドレスです

<http://hokusui.net>



## 特集 北水の今

### 特集 地域水産業共創センター 学内近況報告 おしおろ丸 北極航海へ

- ☐ 総会・ホームカミングデー案内 ☐ 会員の受賞 ☐ 退職教員あいさつ ☐ フォトレポート  
☐ 支部会・クラス会報告 ☐ 寄稿 ☐ 追悼 ほか

# 親潮

第 321 号

令和 5 年度 第 1 号

OYASHIO

## CONTENTS

第101回(2023年)北水同窓会定期総会 開催案内…………… 3

北海道大学ホームカミングデー 2023  
水産学部卒業生・在校生のつどい…………… 3

### 特集 北水の今

特 集 地域水産業共創センター…………… 4  
福田 寛(平15博増)

学 内 おしよる丸 北極航海へ…………… 9  
近況報告 高津 哲也(昭63ギ)

会員の受賞…………… 10  
横山 清氏(昭35工)

退職教員あいさつ…………… 11  
木村 暢夫(昭55ギ)／川合 祐史(昭55食)／山羽 悦郎(昭55ソ)

フォトレポート…………… 14

支部会・クラス会報告…………… 16  
北水同窓会京滋支部 令和5年度総会報告  
北海道大学水産学部 旧北洋水産研究施設海洋生産学部門「米田研究室OB会」  
北水同窓会大阪府支部新人歓迎ジンパのご報告

寄稿…………… 18  
米田 義昭(昭34セ)／井上 晶(平5化)

追悼…………… 23  
箕田 嵩氏(昭31ソ)

学位取得者…………… 24

卒業生の就職先…………… 24

会員の異動…………… 25

会員死亡通知…………… 26

親潮投稿規定・編集後記…………… 28

### お知らせ

## 第102回(2024年)北水同窓会 定期総会 開催案内(予告)

来年の北水同窓会定期総会は東京で開催の予定です。

◎日時:2024年5月25日(土)17:00受付開始 ◎場所:学士会館

会員の皆様には是非ご出席下さいますようお願い申し上げます。

詳細は来年3月の次号でお知らせ致します。

### お問合せ先

● 北水同窓会東京支部 幹事長 釜谷 明 携帯: 080-1220-1970

E-mail:kamatani@yamasa.com

幹 事 松倉広平 E-mail:matsukura@yamasa.com

または ● 北水同窓会事務局／E-mail:hokusuialumni@gmail.com Tel/Fax:0138-42-3681

# 第101回(2023年)北水同窓会 定期総会

[札幌キャンパスで北大ホーム・カミングデー(HCD)と同日開催]

## 開催案内

OG・OBの皆様とご同伴者、在学生・教職員の皆様、同期や先輩・後輩の皆様とお誘いあわせの上、多数のご参加をお待ちしております。

日 時 ● 2023年9月30日(土)

※新型コロナウイルスのまん延が予想される場合、2023年8月4日(金)までに中止またはオンライン開催のみに変更をご連絡させていただく場合がございますこと、ご了承ください。

### 第1部

#### 北海道大学学術交流会館およびオンライン中継

札幌市北区北8条西5丁目(正門より入って左側2棟目・JR札幌駅北口より徒歩10分、駐車場なし)

参加人数把握のため、なるべく参加申し込みをお願いいたします。

オンライン参加は必ずメールでお申込み下さい。

受付 13:30~

水産学部・北水同窓会 HCD講演会 14:00~15:30(下記をご参照ください)

第101回 北水同窓会定期総会  
北水同窓会札幌支部通常総会 15:30~17:00



### 第2部

#### ANAクラウンプラザホテル札幌

札幌市中央区北3条西1丁目2番地9

JR「札幌駅」下車→東改札口を右へ出て札幌駅南口より徒歩7分  
駐車場3時間500円、以降30分毎200円、1泊2,000円(すべて税込)

受付 ● 17:30~ 懇親会 ● 18:00~20:00 会費 ● 5,000円



北海道大学  
ホームカミングデー2023



水産学部卒業生  
在校生のつどい



#### 講演会 海洋調査の現場と「北水魂」～深海から、みらいまで～

講師 日本海洋事業株式会社 取締役運航事業部長 横田 哲也氏

日時 2023年9月30日(土) 14:00~15:30 会場 北海道大学学術交流会館

(参加申込不要、オンライン参加は9月28日までにメールでお申し込みください)

profile  
プロフィール

埼玉県立不動岡高校卒、北大水産学部入学。1998年北大水産学部漁業学科卒。1999年特設専攻科修了。2000年日本海洋事業入社、航海士として調査船業務に従事。その後、陸上勤務にて海務監督や海洋研究開発機構(JAMSTEC)出向、日本サバイバルトレーニングセンター出向(国内初の総合洋上訓練施設設立上げ事業)、帰任後に海務部長を経て現在に至る。

・国際調査船運航者会議(International Research Ship Operators' Meeting: IRSO)メンバー

・一般社団法人水難学会常務委員(国際普及委員会)

#### 連絡先:北水同窓会 本部事務局

FAXまたは郵送にてお申し込みの場合は、  
このページをコピーして送信用紙としてお使いください。

参加ご希望の方は、[お名前、卒業年度・学科、連絡先住所、Fax・電話番号、メールアドレス]を8月30日9月10日までに北水同窓会本部事務局まで郵送、FaxもしくはEメールでご連絡願います。

〒041-8611 函館市港町3丁目1番1号 北海道大学水産学部内

電話(0138)42-3681 FAX(0138)42-3681 メールアドレス hokusuialumni@gmail.com

〈北水同窓会本部事務局あて〉FAX 0138-42-3681

## 第101回 北水同窓会 定期総会 参加申込書 (1名毎に記載願います)

下記に記入し、郵送、FAXまたは同じ内容を8月30日9月10日までにE-mailにてご連絡願います

|                         |                                                                           |                                |
|-------------------------|---------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|
| ふりがな                    | 卒業年度                                                                      | 学 科                            |
| お名前                     | 明・大・昭・平・令<br>年                                                            |                                |
| ご住所 〒( )                |                                                                           |                                |
| 電話 ( )                  | FAX ( )                                                                   |                                |
| E-mail:                 |                                                                           |                                |
| 参加申込欄<br>右記の□に✓をお願いします  | ( いずれかに✓ <input type="checkbox"/> 現地参加 <input type="checkbox"/> オンライン参加 ) | <input type="checkbox"/> 懇親会   |
| 懇親会ご同伴者人数(同額の参加費がかかります) | ( )名                                                                      | <input type="checkbox"/> 参加しない |



# 北海道大学地域水産業共創センターの紹介

福田 覚(平15博増)

## 1. はじめに

北海道大学は、第4期中期目標期間中の2026年に創基150年を迎えます。この節目を迎えるにあたり、北海道大学は世界の課題、日本の課題を典型的に抱える課題先進地にある大学として、「公共財」としてその価値を高め、卓越した世界的研究能力(Excellence)、そして、地域に密着した課題解決のための社会への拡張力(Extension)を融合したハイブリッド大学「社会と歩む卓越(Excellence walking with Society)」を目指すことを掲げています。このハイブリッド大学を目指す一環として、北海道大学大学院水産科学研究院(以下、本研究院)では2022年10月に「地域水産業共創センター(RFC:Regional Fisheries Co-Creation Center)」(以下、共創センター)を設置いたしました。また、共創センターは、北海道大学の産学・地域協働推進機構 社会・地域創発本部のサテライト組織に位置づけられます(図1)。



図1.北海道大学産学・地域協働推進機構の組織図

## 2. 函館地域の産学官連携から地域水産業共創センターが設置されるまでの背景

共創センターの設置から遡ること約20年前、2003年に函館市は函館国際水産・海洋都市構想を策定しました。これは「海」とともに発展してきた函館地域の3つの優位性を活かし、マリンサイエンスの研究分野で世界をリードする国際的な水産・海洋に関する学術研究拠点都市を形成しようという構想です。函館地域における1つ目の優位性は函館地域が対馬暖流、リマン寒流ならびに親潮の異なる3つの海流が流れ込む優良な漁場を形成していること、2つ目は多くの学術機関(本研究院ならびに同大学北方生物圏フィールド科学センター、公立はこだて未来大学、函館工業高等専門学校、函館大学、北海道教育大学函館校、

函館大谷短期大学、函館短期大学、ロシア極東連邦総合大学函館校)や公設試験研究機関(北海道立総合研究機構 函館水産試験場、公財函館地域産業振興財団(北海道立工業技術センター))が立地していること、3つ目は函館の主力の水産資源はイカとコンブであること(当時)、でした。本構想の策定以降、企業の研究所や学術機関において産学官連携の施設が整備され、本研究院にもマリンフロンティア研究棟、マリンサイエンス創成研究棟ならびに函館市産学官交流プラザ(2015年に函館市から北海道大学へ譲渡)が整備されました。一方、2003年度から都市エリア産学官連携促進事業(一般型および発展型)、21世紀COEプログラム「海洋生命統御による食糧生産の革新」、地域イノベーション戦略支援プログラム「函館マリンバイオクラスター」(いずれも、文部科学省所管)といった外部資金を獲得し、産学官連携が推進されてきました。また、本構想を推進する母体として、2009年に一財函館国際水産・海洋都市推進機構が設立され、2014年に産学官の共用研究施設となる函館市国際水産・海洋総合研究センターの共用が開始されました。このように、函館地域は函館国際水産・海洋都市構想を冠に産学官連携を深めつつ脈々と繋いできました。そして、2022年に函館市が採択された地方大学・地域産業創生交付金「函館マリカルチャープロジェクト」事業(内閣府所管)の開始と並行して地域水産業共創センターの設置が成されました。以上の背景のもと、共創センターは先人の方々が取組んだ産学官連携の流れを汲む中で北海道大学に設置され、函館地域はもちろんのこと、その垣根を越えて道南、北海道ならび国内外まで水産業をキーワードに活動する組織です(図2)。



図2.地域水産業共創センター設置イメージ



### 3. 地域水産業共創センターの目的と目標

共創センターは、北海道大学の研究開発力、人材育成力、地域の文化的資源・自然資源等の「地域の強み」を活

かした産学官金協働を推進し、産業の発展とイノベーション創出を通じた地域・社会の振興につながる持続可能なシステムの構築、それらを支える人材の育成を目的として



図3.地域水産業共創センターの機能と人材育成



図4.地域課題解決プロジェクト

います。そのために大学と地域・社会をつなげる産学官金連携の実践の場として、知・情報・人材のハブ機能(個々の企業・自治体関係者・研究者・学生・市民が蜘蛛の巣のように相互に結びつくイメージ)を担い、ワンストップ窓口となることを目標としています。また、共創センターは函館マリカルチャープロジェクトの事業運営と「CREEN人材育成プログラム」の構築・実施に携わっています(図3)。その取り組みの1つとして、付加価値の高い一次産業やマーケティング・起業等を担う人材の育成を目指し、公立はこだて未来大学、函館大学、函館工業高等専門学校との協力を得て起業家育成演習や水産学演習をはじめとするCREEN人材育成カリキュラムの作成・整備、および函館市内の大学・高専生による「地域課題解決プロジェクト」を立ち上げています(図4)。

#### 4. 共創センターの活動紹介

##### ○地域水産業共創センターキックオフイベント

2022年11月、共創センターはキックオフイベント「～大学が地域のためにできること、地域が大学に期待すること～」を開催いたしました。このイベントは、将来起業を志している若者や地域の未来を担う企業の方々と一緒に地域産業を盛り上げるために交流していく機会を作る目的で行われました。参加者は約110名(内:学生約40名、関係者を除く社会人約40名)で、若手起業家の事例紹介(講演会)と開催テーマに基づくパネルディスカッションの後、参加者の方々にビジネスアイデアコンテストや名刺交換会、異業種交流会、ポスターセッションなどのアクティビティに参加して頂きました。異業種交流会では内閣府参事官や寶金清博 北海道大学総長も加わり、活発に意見交換が行われました(図5)。



図5.異業種交流会時に学生と交流する寶金総長

##### ○CREEN人材育成プログラムでの「トップサイエンティスト招へい」

2022年10月、ベルゲン大学(ノルウェー)のIvar Rønnestad 教授が函館市国際水産・海洋総合研究センターで講演しました。講演内容は、ノルウェーでの養殖事業に関する産学官連携の事例紹介で、参加者は約30名でした。Rønnestad 教授はベルゲン大学の生物科学科の教授で、ご専門は魚類生理学で特に魚類の栄養代謝や食欲に係る研究をされています。函館マリカルチャープロジェクトにおけるCREEN 人材育成プログラムでの「トップサイエンティスト招へい」の一環としてお招きしました(図6)。



図6. Ivar Rønnestad 教授(中央)、(左)都木靖彰 地域水産業共創センター長(大学院水産科学研究院長)、(右)清水宗敬教授(FSC)

##### ○地域水産業共創センター ロゴプロジェクト(RFC LOGO PROJECT)



図7.地域水産業共創センター ロゴマーク

2022年12月、地域の学生や若者が主体となり、共創センターを創り上げていくプロジェクトを実施しました。地域の皆さんと一緒に共創センターのロゴマークやロゴタイプを考え、制作するワークショップを開催し、共創センターのロゴマークを決定しました。ロゴマークには、ワークショップで学生から挙げられた、「共創センターが、地域を『繋げる』『巻き込む』『包み込む』ような存在になってほしい」という思いを表現するため、「繋げる、包み込む→手」、「巻き込む→波」というモチーフを採用しました。上下の波は、支え合う手の形を表現しており、「共創」「協力」を表し、4つの雫は、共創センターをハブに「産・学・官・金」が繋がるイメージを表現しています(図7)。



### ○ミニオープンキャンパス

毎年、水産学部では高校生を対象としたオープンキャンパスを実施しております。しかし、参加対象者が全国区のため、地元函館圏の高校生の参加が困難な現状にあります。そこで、共創センターがマリン・ラーニング事業(海と日本PROJECT:日本財団)と協働で、函館圏内の高校を対象に複数回ミニオープンキャンパス(実施内容はミニではなく普段のオープンキャンパスに引けをとりません)の開催に取り組みました(2023年7月より順次実施)。内容は、函館キャンパス内の水槽センターの見学、および北水研究者が自身の研究で行っていることの実演や高校生による体験を通して、水産研究の魅力を五感で感じてもらうとともに大学生と高校生が交流する機会にもなりました(図8)。



図8.ミニオープンキャンパス実施の様子

### ○函館マリンフェスティバル2023

2023年7月、函館国際水産・海洋都市推進機構が主催するイベント「函館マリンフェスティバル2023」の一環として、中・高校生対象のイベント「魚のからだを覗いてみよう!-海と日本PROJECT- ～サケを“解体”してみよう!～」を共創センターがマリン・ラーニング事務局と協働で実施いたしました。本イベントは、サケマス食材と科学の視点で「解体」し、体の構造から「成長」がどのように起こるかを理解しつつ、函館で進められている水産研究についての

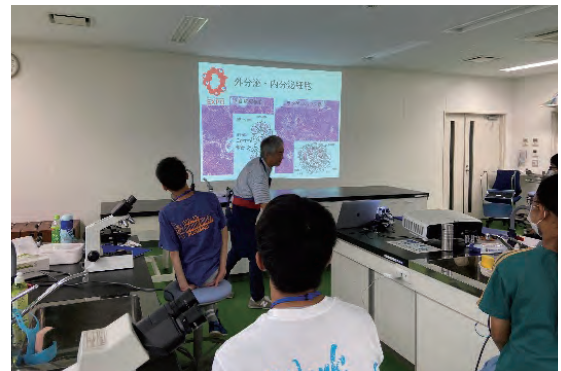


図9.「食材」と「科学」の異なる2つの視点から学ぶ様子

理解を深めてもらうことを目的として北海道大学名誉教授の山羽悦郎先生、函館調理製菓専門学校の北川陸雄先生を講師にお招きして実施しました(図9)。参加者は、食材と



図10.ねんど作りと動画作成の様子



科学の異なる2つの視点から視ることにより、身近な魚であるサーモンに関する理解を深めました。

また、小学校低学年以下とその保護者を対象にしたイベント「自然にかえるねんどで海の生き物を作ろう!」を実施しました。ねんどで作った海の生き物は、コマ撮りのアプリケーションを使って動画を作成し、上映会を行いました(図10)。

## 5. 最後に

共創センターに着任し、半年と数ヶ月が経ちましたが、令和4年度は地域共創業務において企業交流・連携等(産・金)として道内外の企業や金融機関から75件、研究開発に関する企画・実施・調整等(学)として本研究院の教員等から70件(内学部生から2件)、自治体交流・連携等(官)として道南地域の自治体から38件の面談や相談を受ける機会を頂戴いたしました。学術機関はもちろん、公設試験研究機関、産業、行政ならびに金融にいたる産学官金に北水同窓生がおられることを改めて認識するとともに、私益に関わらず共創センターを応援していただき本当に感謝です。開所後、一年も経たないうちに共同研究、人材育成、起業支援、勉強会などの各種相談やご支援の多くを賜っております。この場をお借りして深く感謝・御礼申し上げます。この先も北水同窓生の皆様におかれましては、何かとお世話になるかと存じますが、ご指導・ご鞭撻ならびにご協力・ご支援のほどどうぞよろしくお願い致します。

## 6. 参考

### ○産学官連携事業「函館マリカルチャープロジェクト」

函館マリカルチャープロジェクトは、函館市が事業主体となり、北海道大学をはじめとする函館市内の高等教育機関・研究機関等が参画する5~10年間におよぶ、2022年4月から開始された内閣府の交付金事業です。予算規模は、年間約2.5億円、5年間で約12億円規模のものです。函館地域では海洋環境の変動等に伴い、主力魚種であるイカや天然コンブの記録的な不漁が続く漁業経営が不安定になるとともに、第二次・第三次産業への影響が懸念されております。そこで、本事業は函館市の寒冷環境にある豊かな海と水産・海洋に関する学術研究機関が集積する地の利を活かしたキングサーモンとマコンプの完全養殖技術の確立に取り組むものです。その中で、先駆的な取り組みとして魚類養殖で排出されるCO<sub>2</sub>を海藻養殖により吸収する「地域カーボンニュートラル」(RCN: Regional



図11.函館マリカルチャープロジェクトで掲げるRCN養殖産業のイメージ  
函館マリカルチャープロジェクトHPアドレス  
<https://mariculture.marine-hakodate.jp/>

Carbon Neutral) による水産養殖研究開発を推進し、地域における持続可能な養殖産業群の形成を目指します。また、養殖現場での実践的な教育研究(CREEN人材育成プログラム)により企業と若者を集め地域に定着させることで、持続可能な水産・海洋都市の実現を目指します(図11)。CREEN人材育成プログラムは、市内の高等教育機関(現時点では、本研究院の他に公立はこだて未来大学、函館大学、函館工業高等専門学校)が連携することで、それぞれの強みを活かした人材育成カリキュラムを設定し、産業界のニーズに沿った実学重視の人材育成として、共創センターが中心となり進めています。

## ○北海道大学地域水産業共創センターの問合せ先

〒041-8611 北海道函館市港町3-1-1

北海道大学 函館キャンパス 管理研究棟106号室

TEL: 0138-40-5039

E-mail: kyousou@fish.hokudai.ac.jp

是非、お気軽にご連絡ください。

共創センターHPアドレス  
<https://www2.fish.hokudai.ac.jp/rfc/>

## 学内近況報告

# 練習船「おしよろ丸」5年ぶりに北極航海へ出航

## 2023年6月8日

高津 哲也(昭63ギ)

近年、温暖化や海水減少が懸念されている極域の環境変化が生態系に及ぼす影響を明らかにする目的で、練習船おしよろ丸は6月8日、57日間に及ぶ北極に向けて出航しました。調査は「北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)」の支援を受け、調査だけではなく、人材育成も目的としているため、北大や様々な大学の学生・大学院生も多数乗船しました。



出港式では都木研究院長の挨拶、学生代表の挨拶が交わされ、安全航海を祈念する多数の方々に見送られて(※)、晴天の函館を出港しました。なお北水應援團は現在部員がおらず休止中のため、乗船教員が札幌の北大應援團に声をかけて函館まで駆けつけてもらい、都ぞ弥生、エール、水産放浪歌で見送ってもらいました。寄港地はアラスカ州ノームに2回で乗船者の交代を行い、函館帰港は8月3日を予定しています。

※お見送りの皆様の中で、筆者が気づいた元教員・職員の皆様は、河村章人先生、志賀直信先生、目黒おしよろ丸船長、大越うしお丸船長、上本甲板長、医務室鵜沼さんです(北水同窓会Facebook、Instagramでご覧いただけます)。





# 会員の受賞



CONGRATULATIONS ON WINNING



## 本同窓会 横山 清 会長(昭35エ)が「北海道大学栄誉賞」を受賞

幹事長 高津 哲也(昭63ギ)



北水同窓会横山 清会長が「北海道大学栄誉賞」を受賞しました。この栄誉賞は本学の卒業生もしくは職員で、学術・文化・スポーツの分野・社会活動において顕著な功績のあった方を表彰する制度で、横山会長の受賞は、プロスキーヤーで登山家の三浦雄一郎氏、JFEホールディングス元社長の数土文夫氏に次ぐ3人目です。会長は株式会社アークス代表取締役社長として、88歳となった現在も食品流通業と北海道経済の発展をけん引しています。また北海道大学では、平成18年から令和4年3月まで16年間にわたり「北海道大学経営協議会委員」を務め、恵迪寮同窓会理事長、北水同窓会会長としても本学の多大なる発展・貢献が評価されたものです。

授与式は令和5年8月1日午後、札幌キャンパスフロンティア応用科学研究棟レクチャーホール(鈴木章ホール)で行われ、100名を超える役員教職員参加のもと、寶金清博総長から賞状となる盾と記念品が贈られました。

引き続き横山会長から「流通革命とスーパーマーケット」の講演があり、そのプレゼンテーション資料の表紙には、練習船おしよろ丸V世が使われていました。会長は、学生時代の乗船経験が現在の支えの1つになっており、実学を重視する北海道大学の教育をますます発展

させてほしいとの抱負も述べられました。また半生を振り返り、2年間の三菱芦別炭鉱勤務の後、炭鉱電車の整備の合間に受験勉強をして北大水産学部に入學、航海士を目指すも学部4年生の時に父親を亡くしたことから、7人きょうだいの長男として家計を支えるために専攻科への進学をあきらめ、昭和35年に札幌の商社に勤務し、道東からサンマの買い付けや養豚飼料の販売等を行いつつ、翌年には豚肉を売りさばくために札幌で2番目のスーパーを開業したこと、その後北大や恵迪寮のOBと一緒に会社をやってきたから「スッとお出てパッと消えるからスーパー」にならずに済んだこと、などが紹介されました。また奥様の横山久子夫人も北大水産学部の同級生で、ご本人曰く「結婚できたのは横山清、三大不思議の1つ」。講演は一貫して、同窓の支えがあって現在があること、またいわゆるトップダウンではなく、他の流通業者の皆様との協力関係が重要であることが紹介されました。また今後でもできるだけ現役を続けたいと、力強く宣言されました。

本同窓会では、令和5年9月30日に札幌で実施される総会で改めて、横山会長の今回の受賞をお祝いしたいと考えております。同窓の皆様も是非ご参加ください。

## 退職教員あいさつ



## 退職のご挨拶

木村 暢夫 (昭55ギ)

本年3月末をもって北海道大学を退職いたしました。昭和51年、北海道大学入学から数えると47年、実に半世紀近く北大で過ごしました。この間、長きにわたり、暖かいご指導、ご支援を賜りました北水同窓会の皆様に心から感謝申し上げます。

私は、地元函館出身だったこともあり、自然と北海道大学、そして水産学部の附属練習船おしよ丸の南方航海にあこがれ北大の門をくぐり、漁業学科、そして特設専攻科へ進学しました。学部4年生では希望した漁船運用学講座に配属され、北海道で多発する漁船漁業の海中転落事故を卒業研究の対象としました。昭和55年川島利兵衛教授の研究室には非常に高価な32ビットの計算機が設置され、大沼湖では自航式漁船模型を用いた不規則波中耐航性実験が実施されていました。当時としては独創的ともいえる漁船研究や情報処理装置と解析技術は私を魅了しました。結局、卒業研究を起点とし、小型漁船の海難事故に対し漁業者の安全性を向上させていくことが私のライフワークとなりました。船酔いに非常に弱い私でしたが、海難事故に結びつく実作業時の船体動揺データを計測するため荒天時漁船に乗船してきました。中でも多くの実験を行ったのが練習船うしお丸です。普段出航しない時化た海況で、無理なお願いをして運航していただきました。いつも帰港時には船体動揺で物が散乱し小言を言われたのも、懐かしい記憶です。これらの成果が、少しでも漁船の海難事故減少に繋がり、漁業者の安全性向上に貢献できていたらうれしい限りです。

昭和61年、博士後期課程3年次に北海道大学水産学部助手に採用されてから約36年、多くの学生・研究者に囲まれ充実した時間を過ごさせていただきました。大学の先生の特権は、「人生で一番自由に発想力豊かな学生から、ゼミや日常の会話等を通し新たな刺激と若いエネルギーを分けてもらえる」ことで、この時間を共有することで共に成長することができる。これは恩師の天下井清先生からの受け売りですが、学生のころから聞かされた言葉を、私も改めて実感しています。また、在職中に水産学部附属練習船おしよ丸、うしお丸2隻の代船建造に携わることが出来た事は、漁船研究を行ってきた私にとって大変幸せな巡り合わせとなりました。

平成30年から4年間、北海道大学大学院水産科学研究院長を務めさせていただきました。特に後半の2年間はコロナ禍での対応に追われ、授業や実験等を厳しく制限しました。キャンパスへの立ち入り制限やウェブによる授業等感染対策の結果、学生の姿が消えました。水産学部・水産科学院において必須となる練習船の実習航海やフィールド実験の多くも中止されました。長かったコロナ禍もようやく収束が見えて参りましたが、この間大学を巣立っていった同窓生には、本来の学生生活という貴重な時間を享受できなかったことが残念で仕方ありません。これからは、同窓会の活動中で絆を深めてほしいと思います。

最後に、北海道大学の益々の発展を祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈りして、退職のご挨拶とさせていただきます。





## 退職にあたって

川合 祐史(昭55食)

本年3月末日をもって北海道大学を定年退職しました。学生時代を含めると通算して42年間北海道大学にお世話になりました。在学・在職中に賜りましたご支援とご厚情に深く感謝申し上げます。

昭和51年4月に北海道大学水産類に入学し、39組水産ロシア語クラスで担任の工藤正廣先生(現北海道立文学館館長)の人柄と斬新なロシア語授業に触れたのが北海道大学で最初のインパクトでした。今でも当時のクラスメートは大切な仲間です。翌年10月に水産食品学科に分属となって函館キャンパスに移行し、直後の学科オリエンテーションでおしよ丸(Ⅲ世)に乗船したことが、次のインパクトです。当時の水産食品学科には乗船のカリキュラムがなく、公式に学科学生が乗船する初めてのケースでした。当時の学科担任は羽田野六男先生でしたが、4年生では食品化学第一講座を希望したので、先生のご指導を主に仰ぐこととなりました。同講座は脂質の生化学と成分間相互作用を研究分野とする講座でしたが、魚肉タンパク質の有効利用や乳化機能特性に関する研究に関わることができました。

修士課程修了後の北海道立水産試験場の研究職員としての5年間は現場に近いところで水産業・水産加工業を観察することができ、貴重な経験になりました。その後、昭和62年6月に出身の食品化学第一講座に助手として戻り、魚肉タンパク質と脂質の相互作用研究に携わったほか、当時はアキサケのブナ化に関する研究も始まっており、夜明け前から上磯沖の定置

網でのサケのサンプリングに出向いたことも忘れられません。羽田野先生とともに船上で外観から異常肉質魚を狙ってピックアップを試みました。想定通りにはいきませんでした。研究室に戻ってからの作業後、夜に余剰のサケ卵を使ってイクラ作りもサンプリングの楽しみでした。平成元年には、信濃晴雄先生とのご縁で食品製造学講座に異動し、微生物の機能利用や制御などを守備範囲に加えました。天然物の抗酸化・抗菌研究では、カビの大量培養、オオイトダリの葉と根茎の採集、機能成分の抽出、分画・精製には、多くの学生に担当・協力してもらいました。研究室は、学部・大学院の改組等に伴って水産食品科学分野となり、管理研究棟の全面改修で研究内容も変えざるを得ませんでしたが、学生とともに夜遅くまで実験・研究に勤しんでいた頃が最も充実していたかもしれません。

この間、研究以外で最も大きなインパクトは、拠点大学方式による日韓水産学術交流でした。それまで全く想定していなかった10年間の韓国との交流で、多くの韓国の先生たちとご縁ができ、かけがえのない経験となりました。また、キャリア支援(就職支援連絡会議議長)は10年間担当させていただき、学生の採用や個別、合同の企業・業界説明会等で多くの同窓生からご支援、ご協力を賜りました。重ねて御礼申し上げます。

最後になりますが、北海道大学水産科学研究院と水産科学のますますの発展、同窓の皆様のご健勝を祈念いたします。



## 退職のご挨拶

山羽 悦郎 (昭55ゾ)

昭和51年に北海道大学教養部水産類に入学し、昭和60年12月に水産学部水産増殖学科 発生学遺伝学講座の助手に採用、平成7年4月に水産学部附属の七飯養魚実習施設への配置換えとなりました。北大内の機構改革により同施設が平成13年に水産学部を離れて北方生物圏フィールド科学センターへ統合されたことから、私も水産学部の組織から離れ、現在に至っております。入学以来47年間を北海道大学で過ごさせていただきました。これまで、多くの同窓生、先輩諸氏、教職員、学生の皆様より多くの暖かいご支援をいただきました。退職にあたり、皆様に心よりお礼申し上げます。

私は、小学生の頃から漫画好きで、中高時代は神田や高田の馬場の古本屋で手塚治虫の漫画を買いあさっていました。手塚治虫の火の鳥の未来編の中で、猿田博士がガラスの培養ケースで生物を再生させる研究をやっているのを読み、こんなことが将来できるようになるのかと考えていました。大学の4年生になって水産学部の発生学遺伝学講座で小野里坦先生の指導を受け研究を始めました。小野里先生は、自然界に雌しかいない倍数体のフナをモデルにして、人工的にメスばかりの集団を誘起することを考えていらっしゃいました。私はその元で、紫外線で遺伝的に不活性化した精子を誘導し、その精子による受精で人工的に雌性発生を引き起こす実験をやりました。その後、第2成熟分裂や第一卵割を阻害して倍数性を回復する染色体操作技術の開発にも参加させていた

だきました。

先生が七飯養魚実習施設から水産庁養殖研究所へ転出された後、水産学部の助手に採用された私は、どんな研究をしようかと悩んでいました。その中で、両生類の発生過程で生殖細胞を含むドナー胚の領域を別のホスト胚へ移植すると、ホスト胚はドナー胚に由来する配偶子を産むという論文(Blackler and Fischberg, 1961)を見つけ、これを魚に応用できないかと考えました。これが将来の「借腹生産」の考えにつながりました。しかし、その頃は魚の発生過程の研究はほとんど進んでいませんでした。そこで、魚類の発生機構を解析する基礎的な研究と、胚を操作する様々な技術開発を行ってきました。その結果として、キンギョにフナの細胞を移植したキメラ個体より両方の卵を得ることができました。両生類の研究が、魚でも再現できることが証明できたのです。この過程では柔道部と講座の先輩でもある荒井克俊先生をはじめとして多くの学生・院生・PDに大変お世話になりました。

七飯の実験所に異動してから、平成23年になって池の改修が、そして平成28年に新棟を建設することができました。研究の遂行や新棟の建設には、教員や事務職員を含め様々な方々のサポートがあってできたものと考えております。そして何より北海道大学の自由な学風があったからこそ研究が進められたと感じております。今後の皆様の発展を希望して止みません。ありがとうございました。



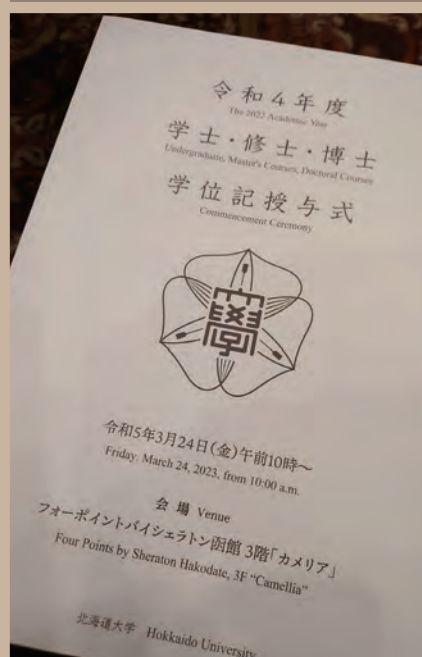
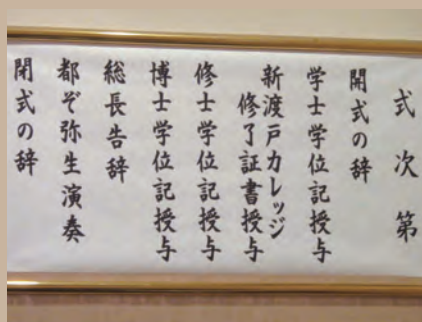
## 学位記授与式 対面で挙行

庶務幹事 田中 啓之(平元化)／会計幹事 井上 晶(平5化)

令和4年度の函館キャンパス学位記授与式は、久しぶりに教員の出席を伴って3月24日函館駅前のホテルにおいて挙行されました。なお、新型コロナウイルス感染防止の観点からご家族の列席は今回も見送られました。  
(文・編集担当)



◀会場の「フォーポイントバイシェラトン函館」(現・プレミアホテルユーキャビンプレジデント函館)



◀会場風景  
「閉会の辞」直後

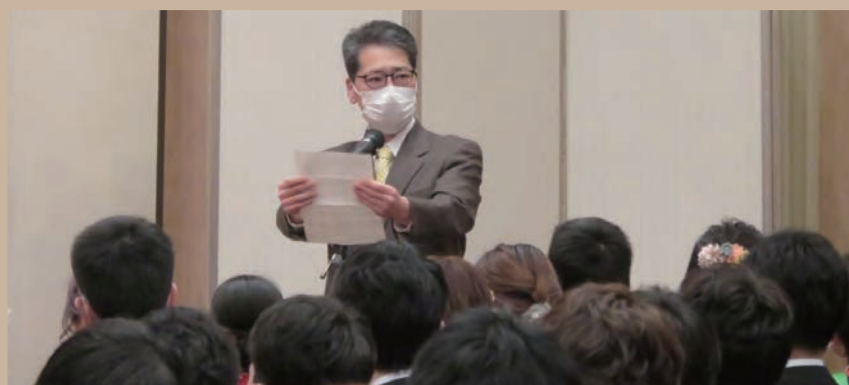


◀ 都木靖彰水産学部長から学科ごと  
に総代に卒業証書を授与  
証書は和文と英文の2通



◀ 卒業者・修了者のご家族へは、インターネット上で  
ライブ中継を実施

▼ 授与式の終了後、高津哲也幹事長からお祝いの言葉とともに  
北水同窓会についてアナウンス





## 北水同窓会京滋支部 令和5年度総会報告 澤田 宣雄(昭57ゾ)



後列左から  
近藤忠裕(昭54化)、若林博(昭54ゾ)、高木正夫(昭62ギ)、  
内田美德(昭46ゾ)、西川一義(昭46ゾ)、澤田宣雄(昭57ゾ)、  
前列左から  
大寄良孝(平元食)、内林善彦(昭55食)

北水同窓会京滋支部の令和5年度総会を、令和5年5月20日(土)午後5時30分から開催し、8名の出席がありま

した。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、令和元年の開催以来4年振りの開催となりました。例年、京滋支部総会は4月中旬に京都駅前で開催していましたが、今回は新型コロナが5類に移行した後の5月で滋賀県大津市の大津駅近くを会場としました。

総会では、新型コロナの影響とはいえ、開催を延期していた間、支部として会員への連絡自体が滞っていたので、支部長からお詫びするとともに、2019年度の収支決算と2020年以降の中間報告および令和5年度の事業計画を提案し、承認していただきました。

懇親会では内田美德先輩(昭46ゾ)の乾杯の音頭で開会となり、久しぶりの再会で、お互いに仕事や身体の近況報告をするなど懇親を深めつつ楽しいひとときを過ごしました。

瞬間に時間が過ぎ、最後に、肩を組んで「永遠の幸」「都ぞ弥生」「水産放浪歌」を全員で歌い、お開きとなりました。

## 北海道大学水産学部 旧北洋水産研究施設海洋生産学部門「米田研究室OB会」

今井 圭理(平4化)



2023年1月21日土曜日、北海道大学水産学部旧北洋水産研究施設海洋生産学部門の米田義昭教授の門下生が函館在住の米田先生の下に集結しました。先生がご退職さ

れてから20年以上が経過したものの函館にてお元気に過ごされていること、米田研究室設立の初期メンバーが定年退職を迎える年頃になったことを機に函館におけるOB会

(MBS会: Marine Biological Science)が企画されました。一方、当時(2023年1月)は新型コロナウイルス感染症の流行が完全に収束してはいないものの、世の中的に人流をとめる動きはなく、複数回のワクチン接種もすすんでいることから、できる限りの感染防止対策を講じつつ開催を決定しました。

このOB会開催日の午後2時から5時まで水産学部講義棟の講義室において全参加者がパワーポイントなどの発表資料を利用して、数十年前の学生に成りきり、米田先生の前で近況を中心として卒業後就いた仕事や研究歴、将来の抱負などについて発表し、それに対して米田先生からご説教をいただく、称して「米田研ゼミ」を行い、夕刻には函館駅前のホテル(Four Points by Sheraton Hakodate)に移動して懇親会を開催するという昼夜2部制のOB会プログラムを計画しました。

当日は近年稀にみる大寒波の到来で遠方からの来会者の移動に支障があるものと心配されましたが、それほど大きな影響はなく、「米田研ゼミ」は水産学部講義棟1番教室において開始時間通りで始まりました。参加者総数は21人となり、函館での開催としては多くのOBに参加していただきました。会の冒頭にまず、門下生のうち残念にも2021年2月に永眠された故小達恒夫さんの冥福を祈り、黙祷を行いました。その後は一人当たり5-10分程度の持ち時間でと案

内を出していたにもかかわらず、話し手は話したいことが山ほどあり、聞き手は楽しく聞き入ってしまい、あっという間に時間が経過しました。そのため、夕刻までに発表を終えたのは参加者の半数に留まりました。会場移動後の懇親会中もゼミは継続され、全員の発表を終えたのが懇親会終了間際でした。懇親会では料理を食べ、酒を飲み、発表を聞きながら隣にいる先輩や後輩と会話もしなければならない、楽しくも忙しい会となりました。それでも、ゼミ開催から懇親会後の会まで入れると相当長い時間を米田先生と門下生は過ごすことができ、学生時代と現在を行ったり来たりする不思議なOB会になったと感じます。やはり、門下生にとって今回一番の収穫は学生時代と変わらずにお元気でいる米田先生と会話ができ、これまでの自分を報告できたことだと思われます。また、どの先生とその門下生同士の関係は同じであるとは思いますが、このOB会で発表された研究・教育の成果を通じて先輩は後輩を助け、後輩は先輩を慕い、その結果として各業界を跨いで同門同士が繋がっていることを再認識することができました。

今回、どうしても都合つかず来会できなかったOB、まだ完全には収束していない新型コロナウイルスの感染を心配して参加を諦めたOBのために、また近い将来、米田研究室OB会の函館開催を計画したいと思います。

## 北水同窓会大阪府支部新人歓迎ジンパのご報告 若林 眞由(平5修食)



北水同窓会大阪支部では、森田隆寛ジンパ実行委員長(平24増生)のもと、2023年6月10日、てんしば(大阪・天王寺公園)にて、新人歓迎会を兼ねたジンパを行いました。当日、20代から70代の北水同窓生(内 令和5年卒1名を含む令和卒が3名)の15名が集い、楽しいひと時を過ごしました。

久保田幸一さん(昭45化)が北海道から取り寄せて下さったマトンは大変美味しく、ビール片手に舌鼓をうちながら、北海道の思い出話で盛り上がりました。

途中で、予定したよりもお肉の消費が多く、大橋支部長が買い足しにいくというハプニングもありましたが、最初の企画にしては概ね成功したと思っています。

このように、普段味わえない年齢の垣根を越えて盛り上がる事が出来るのがジンパの魅力です。「またジンパを開催しましょう。」と笑顔で話しながら、歓迎会を終了しました。メンバー全員、大阪で北海道気分を味わった一日でした。終了後は、若い人たちで2次会に行かれたことも聞いております。

今回も北水同窓会大阪支部のホームページ(<https://hokusuiosaka.net>)等でお知らせをさせていただきますので、大阪だけでなく、多くの北水同窓および学生さんも含めて多くの方にご参加いただければと思っています。



# カナダのパーソンズ教授の死を悼む

米田 義昭(昭34セ)

## はじめに

カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学の名誉教授パーソンズ先生が昨年4月13日に亡くなられた。パーソンズ先生は生物海洋学の分野で優れた研究や著書を残して2000年に退官したが、現役時代に5回にわたって北大水産学部に滞在し、学部学生や大学院生の講義やセミナーを行ってくれた。最初は1969年の夏、調査船エンデバー号による北太平洋横断航海の主席研究者として来函された。当時38歳だった先生は、すでに教授であり生物海洋学者として著名であった。以来2001年までの長きにわたり、学部の教官と親交を重ねると共に学生たちに大きな刺激を与えてくれた。先生は函館をこよなく愛され、大変な日本びいきで、親しみやすい人柄から多くの市民とも親交を深められた。

大学のキャンパスには州都ビクトリア市で客死した新渡戸稲造を惜しんで現地の日本人が造った新渡戸公園や大阪万博のサンヨー館を移設して造ったアジアセンターなどがあり、市民の憩いの場所になっている。また、北太平洋遡河性魚類委員会(NPAFC)は大学内に、北太平洋科学機構(PICES)はビクトリア市郊外のシドニーに事務局が置かれており、本学部とは大変縁が深い。

水産学部は環太平洋の各国の大学と姉妹校提携をしているが、1990年にUBCの理学部との間で姉妹校の提携を行った。姉妹校を結ぶきっかけは1989年のおしよ丸北洋航海に筆者が乗船し、バンクーバー寄港の際に先方の学部長と協議をしたのがきっかけであり、その段取りをしてくれたのがUBC理学部海洋科学科の教授のパーソンズ先生(Prof. Timothy R. Parsons)であった。

## (1)パーソンズ先生の日本国際賞受賞

ノーベル賞を知らない人はいないが、ノーベル賞に匹敵する日本国際賞があることを知る人は意外に少

ない。この賞は松下電器を創業した松下幸之助氏が中心になり、1982年に創設された。以来、毎年国内外の様々な自然科学分野で世界的な業績を残した科学者が受賞の対象になり、メダルと副賞5千万円が授与される。

前年の秋に受賞対象の分野が発表されるが、2001年度は海洋生物学ともう一つの分野が対象との情報もらった。パーソンズ先生が海洋生物学分野の最適任者と思い、筆者は早速、先生と縁の深い筑波大学の関文威教授と相談の上、推薦書を書いて審査委員会に申請した。年が明けた2月に審査委員長から受賞が決まったとの知らせが入った。授賞式の折の審査委員会の審査経過報告によると、200人以上の候補者を慎重審査した上決定されたとのことであった。

受賞の知らせをカナダのビクトリア近郊にお住いのパーソンズ先生宅に早速電話をして伝えた。ご夫婦は大変喜んでくれて春に行われる授賞式には是非来日したいとのことであった。

授賞式が近づき、私達夫婦にも授賞式と天皇皇后がご列席晩餐会の招待状が届いた。カナダ大使館主催のパーティの招待状も来た。当日の授賞式と祝賀の晩餐会に出席することにした。授賞式は両陛下ご臨席の下、国立劇場において約千名が参列して行われた。日本国際賞のメダルと副賞が財団理事長の近藤二郎学術会議議長から授与された。受賞者はパーソンズ先生とテキサス大学のグッドイナフ教授(携帯電話やハイブリッドカーに使われているリチウム・コバルト電池の発明者)のお2人であった。天皇陛下より感謝とお祝いのお言葉があり、2人の受賞者より謝辞が述べられた。

その後、小休止をはさんでアトラクションが行われた。大町陽一郎指揮、東京交響楽団による受賞者のリクエスト曲を中心にした名曲の演奏であった。パーソンズ教授ご夫妻のリクエストはドリーブの Coppélia 序曲とバッハの管弦楽組曲二番であった。高揚した雰



写真 国立劇場における2001年日本国際賞の授賞式  
天皇陛下のお言葉を受ける受賞者（左側左よりパーソンズ教授夫妻とグッドイナフ教授夫妻）

囲気の中で大変晴れがましい2時間余りが過ぎた。

## （2）北海道大学名誉博士号の授与

日本国際賞がパーソンズ先生に授与されて後、様々なイベントが授賞式をはさんで1週間続いた後帰国されたが、筆者としては函館に縁が深いパーソンズ先生を招き、これまでの水産学部の教育と研究両面にわたる貢献を称えて北大の名誉博士を贈れないものかと考えた。北大の名誉博士の称号授与には大学内での厳しい審査があると聞いていたので、パーソンズ先生と親交がある池田勉教授と私が慎重に書類を整えて中村陸男北大総長に提案した。審査会の議を経て授賞が決まった。日本国際賞の受賞からちょうど一年を経た2002年の春のことであった。

パーソンズご夫妻はその年の秋に来日、総長から名誉博士の称号が授与された。その帰路、函館に数日滞在し、市長表敬訪問、函館国際ホテルでの受賞記念講演会を開催した。記念講演は「クラゲは海を征服する？」という題であった。いま思うと、昨年秋に日本海を北上し、道南海域に大きな被害をもたらしたエチゼ

ンクラゲの大発生を予言する内容であった。先生のライフワークであった生態系モデルを実証するような出来事に改めて見識の深さが伺われた。その年、ちょうど古希を迎えた先生がこれからも函館に来る機会があればよいがと思いながら、滞在中の一時を楽しんだ。私のカナダ時代の共同研究者であった先生の晴れがましい姿に接する機会を得たことは自分のことのように嬉しいのである。



写真 名誉博士のコスチューム姿のパーソンズ教授（中）と  
井上副学長（左）、徳永副学長（右）



### (3) パーソンズ先生の研究業績のあらまし

少し専門的になるが先生の経歴や受賞の内容について記録を辿りたいと思う。先生はイギリス出身、カナダのマックギル大学理学部を卒業の後、カナダ・バンクーバー島のナナイモにある水産研究所に勤務中に、ユネスコ本部における生物海洋学の専門官として出向され、バリ勤務に就かれた。その後、バンクーバー市にあるブリティッシュコロンビア大学の理学部海洋学科に教授として転出された。

研究業績としてはシーベックスという研究プロジェクトを立上げたことが挙げられる。このプロジェクトは、複雑な海洋生態系を解明する有効な方法として、巨大なプラスチックバックを海中に設置し、それまでのいわば実験室レベルの小規模実験から自然生態系に近い条件下での実験系を考案され、国家的なプロジェクトとして長年にわたり研究を行った。バンクーバー島のサンニッチインレットに巨大なバックを数基設置し、海の中で起こっている生物と物質との相互作用を解明した。代表的な業績としては、生物濃縮（例えば重金属が海洋生物に蓄積して行くプロセス）や複雑な食物連鎖網の計量、モデル化を行うなど数多くの成果が挙げられる。成書「生物海洋学的諸過程」および「海洋研究のための化学的・生物学的手法の手引き」は1980年代に出版され、いまなお海洋学を志す研究者の参考書になっている。

### おわりに

パーソンズ先生が来函された折りには、多くの水産学部の先生方がご夫妻とお付き合いをし親しくなった。そのきっかけをつくったのは故元田先生である。1969年に元田先生はパーソンズ先生はじめ多くのカナダ研究者が乗船したエンダーバー号が函館に寄港した折、水産学部内で海洋生物と化学に関するシンポジウムを開いた。筆者も発表者の1人に選ばれ、つたない英語で発表した。そのときの座長がパーソンズ先生であった。その後、パーソンズ先生が来訪した折々には、プランクトン講座の箕田嵩さん、池田勉さん、志賀直信さん、海洋化学の松永勝彦さん、工藤勲さん、分析講座の西村雅吉さん、角皆静男さん、北洋研究施設の梶原昌弘さん、三宅秀男さん、築田満さんなどの先生方が親身になってお世話をし、一緒に学び、大いに楽しんでもらった。

筆者は1982年から83年にかけてパーソンズ先生の研究室に客員研究員として滞在し、先生ご夫妻と共著で海水分析のための化学的・生物的手法の手引き (A manual of chemical and biological methods for seawater analysis) の執筆に当たった。帰国直前まで実験と執筆に追われ、帰国直前に完成した。その原稿を手に米国、ヨーロッパ各国を訪ね、多くの海洋学の研究者と議論をし、批評をしてもらった。帰国後、若干手直しをした上1984年にイギリスのパーガモンプレス社より出版した。

現在も北大や全国の大学の多くの後輩たちがパーソンズ先生や先生のお弟子さんをたよってUBCやパーソンズ先生が研究を続けているシドニーの国立海洋化学研究所 (Institute of Ocean Science) を訪れている。筆者はこのような血の通った研究交流が今後もますます盛んになるよう願ひTim Parsons先生の追悼文とさせていただきます。

## 寄稿

# 「函館高等水産学校（北大水産学部）と アジア・太平洋戦争-I」 ～同窓会報「親潮」にみる学徒出陣～

井上 晶(平5化)

現在、函館キャンパス・学生相談室で、相談員として勤務されている島津 彰氏が、水産学部同窓会誌「親潮」の情報に基づいた研究報告として、「函館高等水産学校（北大水産学部）とアジア・太平洋戦争-I」～同窓会報「親潮」にみる学徒出陣～を取りまとめられました。

北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol. 14 (2022年)に掲載され、インターネット上でも公開されており無料で読むことができます。下記のQRコードからアクセスすることができますので、ご利用ください(約5.8 MBのPDFファイル)。

以下、著者の島津氏からのコメントを紹介いたします。

## （「親潮」に寄せて） 島津 彰

この度は、北水同窓会誌「親潮」に拙稿の紹介をいただく機会を得て、大変嬉しく思います。

私の常として大学等に勤務する際は、開学理念の把握や大学の歴史に眼をとおす事に心掛けてきました。縁あって北大水産学部に籍をおいて、最初に閲覧したのが北大百年史でした。その中でも、函館高等水産学校時代の戦争の禍中においても、同窓会誌「親潮」を発行し、絆を深めてきた事に感銘を受けました。百年史には水産学部の戦没者(181名)の名前のみの記載がありますが、戦死状況の記載はありませんでした。元来の歴史好きな事もあり、「親潮」や他の資料の中から、戦死状況(戦没年や地域等)の情報収集に努め、戦没した卒業生の生きた証の一端を記録に留めたいと考えました。

調査する中で、3名の方も新たに名簿に加える事も出来ました。「同窓会」の果たした役割(「親潮」での消

息の交流、出征同窓会員への慰問、遺族への支援)は大きなもので、同窓の絆の結束や遺族への慰めにも大きな役割を果たしております。また、「親潮」の「戦地便り」を読むことで、会員の人物の大きさや有能さが伝わってくるなど、戦没されなければ日本の水産界で大きな働きをしたであろうことが悔やまれます。

昭和18年9月の卒業であった海軍大尉・小久保節弥氏は、特攻隊員として出撃する前に自身の心境を書いたためています。「月光明々如我心」。文才もあり、両親あてへの手紙からも親孝行な方であったようです。

戦争のニュースは毎日のように流れています。いつの世も戦死するのは若者が多く、婦女子も甚大な被害を受けます。今の時代なればこそ、後世に時代に翻弄された優秀な若者の肉声を伝えることは、平和希求の土台として重要なことであると考えています。

末尾になりますが、「親潮」の以下の号が北大図書館、北海道立図書館、国会図書館において、いずれも所蔵されておられません。会員の方で蔵書されている場合はご一報いただければ幸いです。

## 欠番号

【43、47、50-57、60、66、68-73、94の19冊】

相談室メールアドレス:島津 彰  
[soudan2@fish.hokudai.ac.jp]



研究報告アクセス用  
QRコード



## 研究報告

「函館高等水産学校（北大水産学部）とアジア・太平洋戦争－Ⅰ」  
～同窓会報「観潮」にみる学徒出陣～

島津 彰

北海道大学北方領土情報センター学術研究員

## 抄 録

函館高等水産学校（現北大水産学部）は、1907年（明治40年）を創設とし、その間、アジア・太平洋戦争の場中でも、同窓会活動として同窓会報「観潮」を発行し続けた。北大百年史には水産学部の戦没者（167名）の名前のみの記載があり、戦没状況の記載はない。「観潮」や他の資料を併せ、戦没年や地域等、遺書等の情報収集に努め戦没状況の把握を行った。また戦時下での「観潮」の果たした役割（戦地便り等での消息情報、同窓への慰問、遺族への支援）について考察した。後世にその時代に翻弄された若者の声を伝えることは、平和希求の土台として重要なことである。（以下、氏名は敬称略とし、簡名用語は当時の呼称を使用。）

キーワード：北海道大学水産学部、学徒出陣、観潮、アジア・太平洋戦争、時局

## Ⅰ. 函館高等水産学校の略史及び「観潮」の略史

## 1. 函館高等水産学校の略史

函館高等水産学校（現北海道大学水産学部）の創設は、札幌農学校の1907年（明治40年4月）に水産学科の付設に始まり、東北帝国大学農科大学を経て、北海道大学農学部の附属水産専門部を分離し、函館高等水産学校として1908年（昭和10年4月）に開校した。続いて1944年（昭和19年）には函館水産専門学校（漁業科、水産増殖科、水産製造科）と改称した。

1941年（昭和16年5月）には漁業科の専攻科として海洋漁業科（修業期間2年半の内1年半が乗船訓練）が設置された。後に海軍予備員制の役割をも担い、終戦までに2期生の海軍幹部の養成を行った。1949年（昭和24年5月）に北海道大学水産学部、2000年（平成12年）には大学院の課程制に移行、2003年には水産科学研究院として歴史をリロードしている。

## 2. 同窓会報「観潮」の略史

同窓会活動として同窓会報「観潮」を発行し、同窓の絆を深めてきた。創刊号は「北大同窓会報」と称し、大正12年10月15日発行。「観潮」と改題したのは28号（昭和10年6月）からで、昭和12年からは一月に1回の発行

がみられる。発行回数は、戦争開始の昭和16年～昭和17年で9回、18年で8回、昭和19年で4回、昭和20年で3回である。発行回数の減少は、用紙の割りに当り配給の減少等の状況が考えられる。116号（昭和26年1月）は、ガリ版刷りである。最新号は令和4年7月現在では、令和4年3月発行の318号である。

「観潮」北大水産学創設五十年記念誌（昭和32年10月発行）において、明治45年卒の道垣重雄は「出版物については、警務の将高課の検閲がやましかった。特に戦地よりの通信等は目を光らせていた。また、紙本が発行日付より遅れたりするといくらでも文句を言われたもので、当時の編集係は警務まで呼び出されて、うるさく叱責された事も度々であった」と当時の苦境を述懐している。

現存の「観潮」について、水産学部図書館が所蔵していない号を北海道立図書館で調査した結果、【44号～46号、48号～49号、61号～65号、67号、100号～110号】を所蔵。また、同図書館や国史館等にも所蔵していない号は【43号、47号、50号～52号（昭和13年8月～14年5月）、60号、66号、68号～72号（昭和15年5月～11月）、94号】であり、これらの19号分は欠号として、集計・分析を行った。

戦死に関する記事が一面に掲載されるのは44号（昭和

## 1. 「おしよ丸」と函館空襲

## 1) 函館空襲

昭和20年7月14日は、ハルゼー指揮下の米第38機動部隊の艦載機の来襲を受けて、函館市民が犠牲になり、青函連絡が沈められた日である。函館港内の駆逐艦「橘」（葛登支灯台東方、3.4kmの函館湾内で撃沈、135名の戦死<sup>a</sup>）の戦況概報には「①5：40敵艦上機来襲、対空戦闘開始。②6：00至急出港。約一時間にわたりグラマン延べ80機の銃爆撃を受く。③6：40右舷至近弾を受け、航行不能。④6：50中部直雷により瞬時に、右舷に急傾斜。カッタシ灯台の90度2連の地点において沈没せり。」とある。「橘」の攻撃を受けている状況を函館高水の学生は目撃しており、この間、函館の街への攻撃が続き、連絡船、貨物船は防衛のすべもなく、次から次へと沈められていった。

## 2) 「おしよ丸」の英断

この時、港内にいた「おしよ丸」の船長（齊藤一郎：昭和7年漁卒）は、やがて自船も雷撃されると判断し、「部屋から一歩も出るな。」の命令のもと、指定の停泊地ではなく艦載機が攻撃しづらい函館山傍に停泊。学生には「君たちは、次世代を背負った人にならない人間だ。国家、ご両親から預かった命を無駄死にさせる事は出来ない。」と話し、学生の命を救った英断であった。（記事及び写真【航走を撤去した当時の船影】：観



写真9 おしよ丸Ⅱ

表 1 ○北大水産学部関係者（北大同窓生）戦没者名簿（敬称略、順不同）令和4年8月15日（7版）：文責、島津 彰

| 番号 | 卒業年   | 氏名     | 兵種・階級   | 戦没年月日          | 戦死・戦病死地    | 備 考                      |
|----|-------|--------|---------|----------------|------------|--------------------------|
| 1  | 明治45年 | 村林 林平  | 会社員     | 昭和20年5月10日     | 東京         | 東京大空襲                    |
| 2  | 大正3年  | 辻村 吉三郎 | 会社員     | 昭和17年5月        | 南シナ海       | 三連戦中死没・南方勤務途中・水産造船       |
| 3  | 大正8年  | 内山 鮎   | 陸軍・大尉   | 昭和12年12月7日     | 南京陥落       | 欠ヶ崎部隊                    |
| 4  | 大正9年  | 須崎 健吉  | 海軍軍医    | 昭和17年6月29日     | スラバヤ       | 林業商店取締役・南方科捜査中・戦病死       |
| 5  | 大正9年  | 下間 秀雄  | 陸軍技師    | 昭和17年          | 京都大学病院     | 〇〇方面で死・戦病死               |
| 6  | 大正9年  | 相沢 国忠  |         | 昭和20年3月10日     | 東京         | 東京大空襲                    |
| 7  | 大正10年 | 堀田 武一  | 陸軍・警兵中尉 | 昭和13年5月2日      | 中支・崑山付近    | 第七師団・第二兵站司令部             |
| 8  | 大正14年 | 竹井 三郎  | 陸軍中尉    | 昭和20年4月19日     | 日蘭軍曹・南支・港上 | 大連丸・水産(San'in)乗務・北支東部司令部 |
| 9  | 昭和2年  | 西村 豊五  | 陸軍技師    | 昭和20年8月5日      | 北支・ミンダナオ島  | 十四方面軍野戦貨物部               |
| 10 | 昭和2年  | 水上 安藏  | 陸軍・中尉   | 昭和14年7月10日     | 河南省・山西省境   | 太行山嶺山中                   |
| 11 | 昭和3年  | 榎本 次郎  | 陸軍・中尉   | 昭和12年10月26日    | 上海・江西鎮     | 谷川艦隊                     |
| 12 | 昭和4年  | 武田 寛   | 陸軍・軍曹   | 昭和13年3月23日     | 北支         |                          |
| 13 | 昭和5年  | 鬼柳 次生  | 海軍軍医    | 昭和20年5月4日      | ビルマ・緬甸     | ビルマ方面軍野戦貨物部              |
| 14 | 昭和5年  | 大貫 繁信  | 陸軍少尉    | 昭和18年7月5日      | 南方         | 京都府庁（応召）、（熊本大学教官）        |
| 15 | 昭和5年  | 大塚 厚   |         | 昭和20年2/19～3/26 | 鹿児島        | 遺族（群馬県佐野郡島村・妻）           |
| 16 | 昭和6年  | 高年 茂   | 陸軍・工兵中尉 | 昭和12年10月26日    | 河北省・豊島付近   | 第三野戦軍政務署                 |
| 17 | 昭和6年  | 川島 仙松  | 陸軍・工兵大尉 | 昭和14年8月24日     | 濟南陸軍病院     | 北支戦線（兵站電信九中）→戦病死         |
| 18 | 昭和8年  | 町田重三郎  | 陸軍      | 昭和20年1月17日     | 北支ネグロス島    | 福岡県水産行政・応召               |
| 19 | 昭和8年  | 沢田 欣二  |         | 昭和21年9月        | 朝鮮         | 戦病死                      |
| 20 | 昭和9年  | 阿部 敏彦  | 陸軍      | 昭和20年6月        | 北支         |                          |
| 21 | 昭和9年  | 鈴木 武雄  | 陸軍中尉    | 昭和15年5月30日     | 中支         | 亀川部隊                     |
| 22 | 昭和9年  | 榎本 光一  | 陸軍・上等兵  | 昭和13年2月7日      | 久留米陸軍病院    | 昭和12年12月5日・上海北支戦線入院、戦病死  |
| 23 | 昭和9年  | 中沢 威   | 陸軍・上等兵  | 昭和19年9月17日     | ビルマ・モータイク  | 福岡県道森229部隊・戦病死           |
| 24 | 昭和10年 | 榎田 一男  | 陸軍・中尉   | 昭和17年3月7日      | ビルマ        |                          |
| 25 | 昭和10年 | 高橋 和夫  | 陸軍      | 昭和18年          | 〇〇陸軍病院     | 伏字(〇〇)にて戦没年月日不明・戦病死      |
| 26 | 昭和10年 | 酒井 定夫  | 陸軍・大尉   | 昭和18年11月19日    | 第一陸軍病院     | 戦病死・コレヒドール攻陥             |
| 27 | 昭和11年 | 藤 茂    | 陸軍・上等兵  | 昭和14年8月26日     | ノモンハン      | ノモンハン事案                  |
| 28 | 昭和11年 | 遠藤芳之助  | 陸軍・少尉   | 昭和14年8月30日     | ノモンハン      | ノモンハン事案                  |
| 29 | 昭和11年 | 藤田 克人  | 陸軍・軍曹   | 昭和14年8月26日     | ノモンハン      | ノモンハン事案                  |
| 30 | 昭和11年 | 石川 博介  |         | 昭和20年4月        | ニューギニア     |                          |
| 31 | 昭和11年 | 竹田 政雄  |         | 昭和20年          | 沖縄         |                          |
| 32 | 昭和12年 | 竹井 清   | 陸軍・上等兵  | 昭和13年8月10日     | 福建省・張鼓峯    | 張鼓峯事件                    |
| 33 | 昭和12年 | 関根 春夫  | 陸軍・中尉   | 昭和19年6月21日     | 第125兵站病院   | ニューギニア/マタワリ・戦病死          |
| 34 | 昭和12年 | 中野 勘助  |         | 昭和20年2月        | ビルマ        |                          |

## 追悼寄稿

### 箕田 嵩先生のご逝去を悼む

志賀 直信 (昭44ゾ)

令和5年1月26日に箕田嵩先生がご逝去されました。お近くにお住まいの河村章人先生(昭37ゾ)から連絡をいただき、大変驚きました。昨年8月に広海十朗さん(昭50ゾ)とお宅にお邪魔したのが最後となりました。数年前に



奥様を亡くなされ、しばらく寂しくされていましたが、その時は90歳とは見えないお元気なお姿で自炊生活を楽しまれている様子でした。「来年もまたお伺いします。先生お元気でお過ごしください」とお宅を辞したのに本当に残念です。お嬢様によりますと、先生は昨年暮れから息苦しいことがおありでしたが、病院に行くのを拒んでおられたようですが、新年早々入院なさいました。お葬儀は、コロナウィルス感染予防のため家族のみで執り行う旨連絡がありましたので、参列もかなわず唯々ご冥福をお祈りしました。

先生は昭和7年北海道小樽市にお生まれになり、昭和31年3月北海道大学水産学部水産増殖学科を卒業後、同33年3月同大学大学院水産学研究科水産学修士課程を修了、同35年5月大学院博士課程を退学と同時に北海道大学水産学部助手に採用されました。その後、同46年6月助教授、同52年4月教授に昇任され水産増殖学科浮游生物学講座、平成7年4月からは水産海洋学科生物海洋学講座を担当され、平成8年4月北海道大学名誉教授になられました。

箕田先生は、一貫して北部北太平洋およびベーリング海における動・植物プランクトン、特に動物プランクトン群集の構造と機能の解明に専心し、幾多の

分類学および生態学的知見の蓄積に貢献されました。練習船を有する水産学部ならではの外洋域のフィールドサイエンスを目指し、学部学生、大学院生と乗船され多数の有為な人材を育成されました。とくにベーリング海において永年にわたって採集したプランクトン試料を解析し、その一翼を担われた『ベーリング海の海洋学』は国内外で高く評価され、当該海域のプランクトン研究の教科書的存在で現在でも広く引用されています。

私は学部4年生から先生が退官されるまでずっと教室で一緒させていただきました。一つひとつ思い出を思い起こしていますが、4年生のときのことが一番鮮明に思い出されます。昭和43年当時、白尻に水産実験所を建設することが決まっており、白尻沿岸のプランクトンのファウナ、フローラを調べることが私の卒論テーマでした。6月の最初のサンプリング時に漁師の繰る小さな船外機付き磯舟に先生と私が乗り、ネット採集とヴァンドン採水を行っていましたが、私はしばらくして船酔いしてしまいました。胃から込み上げてくるのを堪えて作業していましたが、何度目かの周期に堪えられず、ついに嘔吐してしまいました。とっさのことで風の向きを見極める余裕がありませんでした。船縁から身を出したつもりでしたが、運悪く風下にいた先生にどのような被害があったかは想像に難くないでしょう。先生はこのことに対して一言も怒らず、「右腹を下にして横になると楽だぞ」と仰って、あとの作業は全部ひとりでされました。それ以来、私が先生に頭が上がらないのは当然の成り行きです。湯の川にあった官舎に学生が大挙してお邪魔し、奥様の手料理をご馳走になりました。教室での先生は少し気難しい面もありましたが、ご自宅ではとても素晴らしいホスト役をなさっていました。なぜか2階脇に「朝日ジャーナル」が山積みになっていたことが印象に残っています。いつまでも先生のご恩は忘れません。本当にありがとうございました。

□学位取得者【令和4年度3月取得】

|              |                                                                                                                                                                                                                      |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 賈 川          | Study on the monitoring methods for early warning of harmful organisms such as jellyfish and macroalgae near the water intake of the nuclear power plant<br>(原子力発電所取水口の周辺海域におけるクラゲ類・海藻類等有害生物の早期警戒のためのモニタリング手法に関する研究) |
| 酒井 健一        | 漁家経営の持続安定化に向けた小型底びき網漁業の省エネ・省力化に関する研究                                                                                                                                                                                 |
| 長野 晃輔        | 青森県周辺海域におけるミズダコ漁業の改良と漁獲量予測に関する研究                                                                                                                                                                                     |
| 村松 美幌        | Subsurface warming process associated with Pacific Summer Water transport north of the Chukchi shelf in the Arctic Ocean<br>(チュクチ海北方域における太平洋夏季水の輸送に伴う亜表層貯熱量の増加過程)                                                    |
| 山田 寛之        | Evolution reducing downstream displacement in juvenile salmonids<br>(サケ科魚類の稚魚における流下を抑制する進化)                                                                                                                          |
| 王 栄夫         | Trophic ecology of Pacific cod <i>Gadus macrocephalus</i> off the southern and northeastern coasts of Hokkaido<br>(北海道南岸および北東岸沖合におけるマダラ <i>Gadus macrocephalus</i> の栄養生態に関する研究)                                      |
| Ulfah Amalia | Study on Potential Allergenicity of <i>TERASI</i> , Indonesian Shrimp Seasoning, and its Reduction by Processing Technology<br>(インドネシア産エビ調味料テラシのアレルギー誘発性と加工技術による低減化に関する研究)                                           |
| 柴田 季子        | クローン生殖を行うドジョウに特異的な遺伝学的マーカーの開発と野生型系統の実験交配による特殊な生殖様式の再現に関する研究                                                                                                                                                          |
| 由比 智春        | キタムラサキウニ ( <i>Mesocentrotus nudus</i> ) の新規卵黄タンパク質である Apolipoprotein B 様タンパク質に関する生化学および分子生物学的研究                                                                                                                      |
| 楊 博学         | Study on the functional enhancement of fish collagen by glycation using the Maillard reaction<br>(メイラード反応を用いた糖修飾による魚類コラーゲンの機能性増強に関する研究)                                                                              |
| 和根崎 智        | 糖・脂質代謝改善に寄与する $\beta$ -コングリシニンおよび魚油併用効果の基礎研究                                                                                                                                                                         |

□学位取得者【令和5年度6月取得】

今年度より6月、9月取得を第2号に、12月、3月取得を第1号に掲載します

□令和4年度 卒業者(学部)・修了者(修士・博士)の就職先一覧

学 部

KDDI株式会社／NSユニテッド海運株式会社／Proximar Sea food／SCSK北海道株式会社／アクセンチュア株式会社  
アダストリア株式会社／いなば食品株式会社／カルビーポテト株式会社／トヨタ自動車株式会社／ホクレン農業協同組合連合会  
株式会社Flamers／株式会社KSK／株式会社インフィニットループ／株式会社オプサス／株式会社コリン／株式会社テレビ朝日  
株式会社ニッスイ／株式会社マルハニチロ北日本／株式会社ミネベアミツミ／株式会社りそな銀行／株式会社海遊館／株式会社住友倉庫  
株式会社大嶋農場／株式会社北海道銀行／丸紅株式会社／宮島醤油株式会社／国土交通省北海道開発局／新潟県庁(水産職)  
税理士法人しらかば総合会計事務所／全国酪農業協同組合連合会／大阪府庁／奈良県教育委員会／日本ステージ株式会社  
不二製油株式会社／北海道電力株式会社／和歌山県庁 ほか



## 修士

Inspur (浪潮) / Merieux NutriSciences / NECレノボ・ジャパングループ / アース製薬株式会社 / いすゞ自動車株式会社  
 いであ株式会社 / いなば食品株式会社 / カルビー株式会社 / キューピー (中国) 上海支社 / クオリサイトテクノロジーズ株式会社  
 ジーエルサイエンス株式会社 / ジャパンマリンユナイテッド株式会社 / セーフィー株式会社 / タカラバイオ株式会社 / ニチモウ株式会社  
 マルハニチロ株式会社 / ミツカングループ / ヤマサ醤油株式会社 / よつ葉乳業株式会社 / りそなグループ / 旭酒造株式会社  
 伊藤ハム株式会社 / 一般財団法人千葉県薬剤師会検査センター / 楽天グループ株式会社 / 株式会社 Mizkan J plus Holdings  
 株式会社 JSOL / 株式会社 アクテイス / 株式会社 ウェザーマップ / 株式会社 エスプール / 株式会社 サーバーワークス  
 株式会社 シジシージャパン / 株式会社 ニチレイフーズ / 株式会社 ニッスイ / 株式会社 ニッポン / 株式会社 ニトリ  
 株式会社 バシフィックコンサルタンツ / 株式会社 マイナビ / 株式会社 マル井 / 株式会社 みずほフィナンシャルグループ / 株式会社 ヤクルト本社  
 株式会社 ローソン / 株式会社 伊藤園 / 株式会社 永谷園 / 株式会社 合食 / 株式会社 資生堂 / 株式会社 福井村田製作所  
 岩手県庁 / 宮城大学 食産業学群 / 湖池屋株式会社 / 行政書士 M&K 総合事務所 / 合同酒精株式会社 / 国土交通省  
 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 / 札幌市役所 / 三栄源エフ・エフ・アイ株式会社 / 三菱電機ソフトウェア株式会社 / 秋田県庁  
 商船三井株式会社 / 小島化学薬品株式会社 / 水産庁 / 積水化学工業株式会社 / 川崎地質株式会社 / 双日株式会社 / 大阪市役所  
 第一稀元素化学工業株式会社 / 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 / 中部飼料株式会社 / 東京海上日動火災保険株式会社  
 東京都庁 / 東京都文京区 / 東日本電信電話株式会社 / 東洋水産株式会社 / 独立行政法人 日本学術振興会 / 日産自動車株式会社  
 日清エンジニアリング株式会社 / 日清製粉株式会社 / 日本たばこ産業株式会社 / 日本ロレアル株式会社 / 日本放送協会 (NHK)  
 日本郵船株式会社 / 富士通株式会社 / 北海道栽培漁業振興公社 / 北海道大学大学院水産科学研究院 / 北海道庁 / 味の素株式会社  
 鈴与株式会社 / 六甲バター株式会社 ほか

## 博士

Chinese Academy of Sciences / Office of People's Committee of CaMau City / カントー大学経済学部 / ディポネゴロ大学 / 愛媛大学  
 国土交通省気象庁山形地方気象台 / 国立研究開発法人水産研究・教育機構 / 国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産大学校  
 地方独立行政法人青森県産業技術センター / 東京大学大気海洋研究所 / 函館短期大学 / 不二製油株式会社  
 北海道大学大学院水産科学研究院 / 北海道庁 ほか

## □ 会員異動

### ○ 令和5年3月31日付 退職

|       |                            |
|-------|----------------------------|
| 川合 祐史 | 大学院水産科学研究院教授が定年のため退職       |
| 木村 暢夫 | 大学院水産科学研究院教授が定年のため退職       |
| 山羽 悦郎 | 北方生物圏フィールド科学センター教授が定年のため退職 |
| 西村 欣也 | 大学院水産科学研究院准教授が定年のため退職      |
| 前川 和義 | 大学院水産科学研究院助教が辞職            |

### ○ 令和5年4月1日付 就任・採用

|       |                         |
|-------|-------------------------|
| 大木 淳之 | 大学院水産科学研究院准教授を同教授に採用    |
| 安間 洋樹 | 大学院水産科学研究院准教授を同教授に採用    |
| 阿部 泰人 | 大学院水産科学研究院助教を同准教授に採用    |
| 西村 欣也 | 大学院水産科学研究院准教授を同特任准教授に採用 |
| 坂岡桂一郎 | 水産学部付属練習船うしお丸准教授(船長)を再任 |

## 会員死亡通知

|       |         |             |                |
|-------|---------|-------------|----------------|
| 村上 敬  | (特別会員)  | 令和5年 7月16日  | 学内より           |
| 須藤 悟朗 | (昭19ゾ)  | 令和元年        | ご家族様より         |
| 山口 志郎 | (昭22セ)  | 令和2年        | ご家族様より         |
| 丸山 三郎 | (昭22ゾ)  | 令和5年 3月 4日  | ご家族様より         |
| 南部 重夫 | (昭23ギ)  | 令和4年 1月13日  | ご家族様より         |
| 石井 昭  | (昭24セ)  | 令和5年 4月 3日  | ご家族様より         |
| 大野 哲朗 | (昭25教セ) | 令和5年 1月31日  | ご家族様より         |
| 小中 秀世 | (昭26ギ)  | 令和4年 9月18日  | ご家族様より         |
| 久保 邑男 | (昭28ギ)  | 令和5年 6月 7日  | ご家族様より         |
| 池田昌一郎 | (昭29セ)  | 令和4年10月11日  | ご家族様より         |
| 斉藤多実司 | (昭30ギ)  |             | ご家族様より         |
| 唐牛 公平 | (昭30ゾ)  | 令和5年 3月 9日  | ご家族様より         |
| 木村 義一 | (昭30ゾ)  | 令和5年 3月 2日  | ご家族様より         |
| 川村 一廣 | (昭33ゾ)  | 令和5年 1月 8日  | ご家族様より         |
| 石塚 郁郎 | (昭34セ)  | 令和5年 6月15日  | ご家族様より         |
| 大橋 弘介 | (昭36ギ)  | 令和3年10月16日  | ご家族様より         |
| 高田 健伍 | (昭36ギ)  | 平成31年 2月11日 | ご家族様より         |
| 鈴木 賢一 | (昭36セ)  | 令和5年 5月23日  | 石川 光男(昭36セ)様より |
| 山田 俊夫 | (昭36セ)  | 令和5年 2月 1日  | ご家族様より         |
| 石川 徹二 | (昭36ゾ)  | 令和5年 1月20日  | ご家族様より         |
| 村上 幸一 | (昭38ギ)  | 令和5年 3月16日  | ご家族様より         |
| 竹内 忠一 | (昭40セ)  | 令和4年 8月12日  | ご家族様より         |
| 水島 幸一 | (昭43ギ)  | 令和5年 5月18日  | ご家族様より         |
| 佐藤 昭彦 | (昭44ゾ)  | 令和5年 4月 2日  | ご家族様より         |
| 高橋 勝実 | (昭44ゾ)  | 令和5年 1月20日  | ご家族様より         |
| 相田 弘一 | (昭45食)  | 令和4年10月14日  | ご家族様より         |
| 前田 重春 | (昭48化)  | 令和4年 6月 3日  | ご家族様より         |
| 佐々木俊雄 | (昭49ゾ)  | 令和5年 3月19日  | 北海道新聞より        |
| 金子 実  | (昭50ゾ)  | 令和5年 3月10日  | ご家族様より         |
| 山下 耕三 | (昭55化)  | 令和4年11月13日  | ご家族様より         |
| 原田 暢善 | (昭60食)  | 令和5年 2月17日  | 吉岡 武也(昭60食)様より |
| 阿部 珠巳 | (昭61食)  | 令和5年 2月     | ご家族様より         |



# 株式会社 釣 八

URL <http://www.tsuru8.co.jp/>

よく間違えられますが、「つるはち」って読みます。

社長の名前が「つるみ」だから。

世界中の海から、イカ、赤魚、サバ等なじみのある水産物を、

いま、求められるかたちにして、お届けできるように奮闘努力刻苦勉強

代表取締役 釣見 泰之(昭和59年 漁業学科卒)

【水産学部卒業社員】 土井 倫行(昭和60年卒) 倉部 徹(昭和60年卒) 水井 修(昭和58年卒)

## 本社

〒104-0042 東京都中央区入船3-8-7 ザ・ロワイヤルビル2F

TEL03-3297-8883 FAX03-3297-8885

八戸支店 〒031-0833 青森県八戸市大久保字野馬小屋2-3 ウィステリアB102 TEL 0178-38-8371

銚子支店 〒288-0041 千葉県銚子市中央町9-16 中央町ビル3F TEL 0479-25-8822

大阪支店 〒553-0001 大阪府大阪市福島区海老江2-2-5 SYDビル301 TEL 06-6131-8418

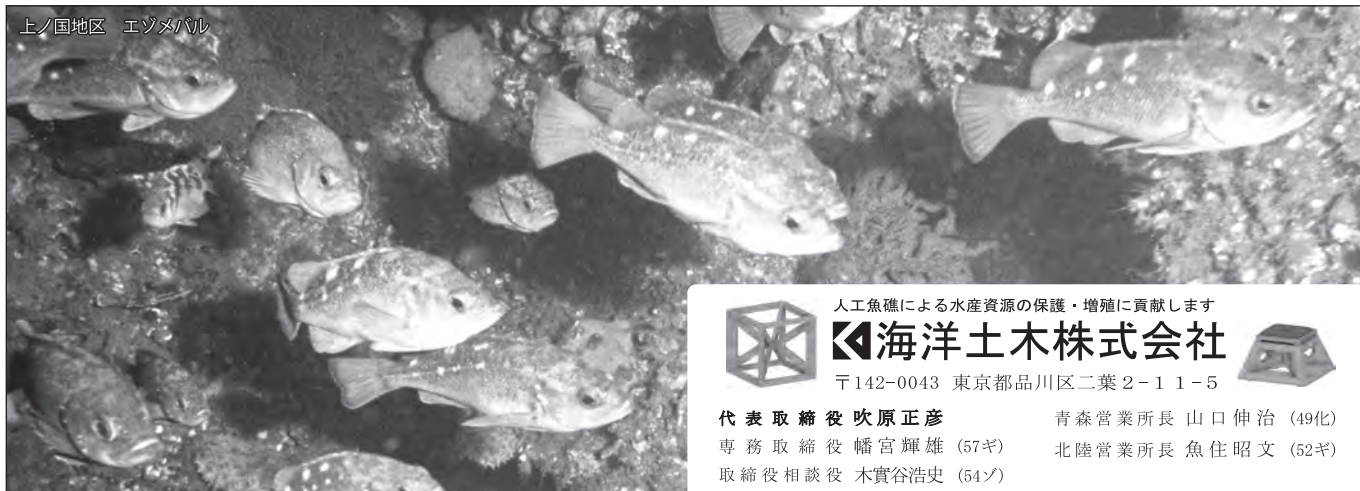
福岡支店 〒812-0011 福岡県福岡市博多区博多駅前3-18-28 フクオカZビル 7F TEL 092-401-8828

## 関連会社

(株)釣十(豊洲/マグロ仲卸) (株)いかめし阿部商店 札幌蟹販株式会社

大連釣八(中国/水産物加工) フィッシングエイト(US/LA)

上ノ国地区 エゾメバル



人工魚礁による水産資源の保護・増殖に貢献します

## 海洋土木株式会社

〒142-0043 東京都品川区二葉2-11-5



代表取締役 吹原正彦

青森営業所長 山口伸治 (49化)

専務取締役 幡宮輝雄 (57ギ)

北陸営業所長 魚住昭文 (52ギ)

取締役相談役 木實谷浩史 (54ゾ)



## 株式会社 竹田食品

代表取締役 竹田 寿広

営業所：札幌・東京・大阪・福岡

本社工場：北海道函館市浅野町3番10号

TEL：(0138)43-1110(代)

HP：<https://takeda.hakodate.jp/>



相続 離婚 債務整理 交通事故 労働問題 会社顧問

相談料は全て無料です

# 吉原法律事務所

札幌弁護士会 弁護士 吉原 美智世 (昭和48年増殖学科卒業)

お気軽にお問い合わせ下さい

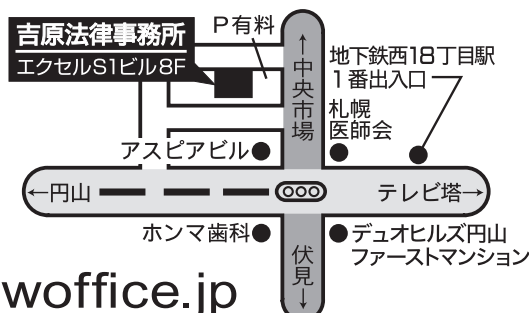
**TEL 622-7963 FAX 622-8414**

札幌市中央区大通西20丁目2-20  
(エクセルS1ビル8F)

**交通**

東西線西18丁目地下鉄1番出口

**E-mail** lawyer@yoshihara-lawoffice.jp



営業時間においでになれない方はご相談下さい。

## 親 | 潮 | 投 | 稿 | 規 | 定 |

### 【寄稿、支部・会員便り、会員の受賞、ご案内など】

一つの投稿につきA4版・1ページ(2000字程度)までとする。この制限以上の長文あるいは連載を希望される場合は2号分までとする。写真を入れる場合、その分の文字数が減る。また写真はホームページに掲載することもできる。原稿は、同窓会宛に封書で郵送するか、同窓会のメール宛に送付することとする。

### 【同窓生の声】

各種活動や出版物の告知・紹介、本誌への感想など。個人的な連絡は対象とせず、1記事につき300字以内。同窓会あてのメール(hokusuialumni@gmail.com)にて受け付けます。写真は入れられません。

## 【編集後記】

今号の特集では北水の新たな目玉プロジェクト「地域水産業共創センター」を取り上げ、新鋭の専任教授・福田覚先生に筆を執っていただきました。地域連携を重視する北大にあって益々の発展が期待されます。一方、「親潮」は昨今の物価高騰から規定の頁数の維持が難しくなりつつあります。編集担当では様々な工夫によってお伝えする内容が減ることのないよう努めて参ります。皆様には変わらないご寄稿のほどよろしくお願い申し上げます。次号の締め切りは1月10日です。

編集幹事/安藤 靖浩(昭63化)

令和5年8月発行

北 水 同 窓 会

〒041-8611 函館市港町3-1-1

TEL & FAX.0138-42-3681

E-mail:hokusuialumni@gmail.com